10:24
完了
20140409-公明３面.pdf

主張

食物アレルギー

学校給食の対策は万全か

国の指針踏まえ、きめ細かい対応を

学校給食のアレルギー事故を巡り、昨年、東京都調布市で起きた児童が亡くなる事故を受け、再発防止策を講じて来た文部科学省の調査委員が去月、最終報告をまとめた。同委員は公明党の強い要請で設置されたのだ。

教育委員会や学校など現場機関は、事故防止に向けた対応を強化して欲しい。

最終報告では、現代の問題点として、学校給食における食物アレルギーの対応などを示した国の「ガイドライン」に触れ、きめ細かい体制が行われていないと指摘している。

なるお方だけで、国や自治体は実践の大切さを強調する姿勢を示すべきだ。

学校現場は、職員の不安や負担軽減につながるかどうか。

アレルギー問題ではどもは、事故を起こさないことが、最も大切なことだ。

一人一人のアレルギー体質を正確に把握することが第一歩だ。学校現場は、早急に、学校給食に対して、厳しいチェックをすることが必要だ。

医師が診断結果や緊急時の対応などについて記した申請書を「学校生活管理指導表」の提出を必要とし、学校全体での情報の共有を求めている。

文科省は今年度、ガイドラインの内容を分かりやすくした資料の作成や講習会の拡充・徹底を図るなどの方策を示している。

ただ、学校給食には後の大切な食事である。「食育」の意味もある。アレルギー対応の目的にかかわらず、可能な限りの向上に取り組んでいきたい。

医師が診断結果や緊急時の対応などについて記した申請書を「学校生活管理指導表」の提出を必要とし、学校全体での情報の共有を求めている。

文科省は今年度、ガイドラインの内容を分かりやすくした資料の作成や講習会の拡充・徹底を図るなどの方策を示している。

学校給食の対策は万全か。国の指針踏まえ、きめ細かい対応を

◇一般投稿は400字以内。はがきでの投稿も可
◇「アングル」は写真の簡単な説明を添えて
◇「読者イラスト」は、はがきで
◇宛先は、〒160-8521 公明新聞投稿係。FAXは03(3225)0230
◇原稿、写真はメールでも受け付けます hamon@komei.jp
◇郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、年齢、職業、電話番号を明記
◇原稿は推敢を変えずに掲載する場合があります
◇応募原稿や作品は返却しません
◇他紙・誌との二重投稿はご遠慮ください
◇掲載分には薄謝をお送りします
◇投稿欄は原則、月・火・木・金曜日に掲載の予定になっています

投稿欄「投稿」をよろしくお願いします

睡眠薬や抗不安薬など

深刻な"処方薬依存症"

精神科などで処方された薬が原因で、薬物依存症に陥る人が増えているという。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所の松本俊彦氏は、精神科医の立場から、この問題に警鐘を鳴らしてきた。深刻な実態について同氏の見解を聞いた。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 **松本俊彦**氏に聞く

まつもと・としひこ　1691年生まれ。佐賀医大卒医学博士。医学博士（横浜市立大学）。精神保健指定医。精神保健福祉士。神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学付属病院などを経て、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に所属。現在、薬物依存研究部部長。研究所内の「ワンストップ対策センター」責任者。著書に「すりにたよらない精神医学」（共編著）、「覚醒・自殺と向き合う」など。

※松本氏らによる実態調査結果を基に編集部作成

覚せい剤に次ぐ患者数

過量な摂取で新たな病気に

―処方薬による薬物依存症（処方薬依存症）と覚せい剤やシンナー、あるいは抵抗ハーイメージがある思う。

松本　一般に、薬物依存症と聞くと、覚せい剤やシンナーを使用する人がまず思い浮かべ、快楽や刺激を求めて手を出すというイメージがある思う。

ところが、「不眠や不安薬（睡眠薬、抗不安薬）を解消するため」「辛い気分を改善するため」、つまり治療目的で、

まの薬の使用を続けると、精神科で処方された睡眠薬や抗不安薬を乱用した結果、依存症に陥ることがある。これが処方薬依存症だ。薬の摂取を中断した際に起きる精神的・身体的症状（離脱症状）の苦しさは、他の薬物依存症と同じなんだ。

―現代を考えると、薬物依存症に陥ることは、大変ショックなことだ。

松本　そうだ。その診断基準は、それが原因で、医師が患者から訴えられる。日本は、薬物依存症に関しては、それが原因で、医師が患者から訴えられる。

精神療法重視へ転換せよ

―薬物依存症に対する、医師としての対応はどうあるべきか。

松本　まず、薬物依存症の原因は、薬物依存症ハンドブック（第2版）の冒頭に書いてあるように、「医師が患者に与えた薬」だ。

医師は、患者に対して、「薬物依存症を起こすなよ」と言ってはいけない。その「方」で、「薬物服用を禁じる」と、薬の服用を禁じられてしまう。

―一人の患者に対してもっぱら薬を処方するとき、薬物依存症を起こすかが、薬剤師を中心とする医療チームが関わってくれば、薬の処方を減らすことも、医師が患者から訴えられることも、まず、薬に頼らなくてもいい。

松本　そうだ。その診断が関わってくれば、薬の処方を減らすことも、医師が患者から訴えられることも、まず、薬に頼らなくてもいい。

今、求められているのは、処方薬というモノ（薬）を処方するとき、薬剤師が患者に対して、薬の服用の仕方を説明するというプッシュ（押し）型の情報提供スタイルが、薬剤師の仕事の中心になる。

一人の患者に対してもっぱら薬を処方するとき、薬物依存症を起こすかが、薬剤師を中心とする医療チームが関わってくれば、薬の処方を減らすことも、医師が患者から訴えられることも、まず、薬に頼らなくてもいい。

今、求められているのは、処方薬というモノ（薬）を処方するとき、薬剤師が患者に対して、薬の服用の仕方を説明するというプッシュ（押し）型の情報提供スタイルが、薬剤師の仕事の中心になる。

医師の不適切な対応も問題

"意図しない自殺"促す恐れ

―薬物依存症に陥る人が増えている。医師の対応はどうあるべきか。

松本　まず、薬物依存症の原因は、医師が患者に与えた薬だ。

医師は、患者に対して、「薬物依存症を起こすなよ」と言ってはいけない。その「方」で、「薬物服用を禁じる」と、薬の服用を禁じられてしまう。

―一人の患者に対してもっぱら薬を処方するとき、薬物依存症を起こすかが、薬剤師を中心とする医療チームが関わってくれば、薬の処方を減らすことも、医師が患者から訴えられることも、まず、薬に頼らなくてもいい。

松本　そうだ。その診断が関わってくれば、薬の処方を減らすことも、医師が患者から訴えられることも、まず、薬に頼らなくてもいい。

今、求められているのは、処方薬というモノ（薬）を処方するとき、薬剤師が患者に対して、薬の服用の仕方を説明するというプッシュ（押し）型の情報提供スタイルが、薬剤師の仕事の中心になる。

アテント
エリエール
はじめての「自宅介護」こそ、経験の「アテント」を。
NEW
《エリエール介護相談ダイヤル》
0120-062370
http://www.elleair.jp/attento/
大王製紙株式会社